

脳の仕組みからいえば、自身の個性を掘り下げるためには、自分という存在を客観的に見る「メタ認知」のプロセスが大切になる。

ここで重要なのは、「自分が何者であるか」という「個性」を、固定化して考えないことである。常に他者との関係の中で柔軟に変化する存在として、自分の個性をとらえることが大切である。「絶対視しないこと」は、「自分」に対しても忘れてはいけない。「自身」について考える際にどうしても避けなければならない「畏」は、自分自身の立場がこの世界の中で特別なものだと思い込んでしまうことであろう。それを避けるために必要なのは、自ら進んで**偶有性**の中に身を置くことである。

~~~~~

偶有性

アリストテレスの用語で、**endekomenon** の訳語。存在することもしないこともありうるものの在り方をいう。ラテン語では **contingens** という。論理的には「その存在が必然ではないが、それが存在するとしても、そのゆえに、いかなる不可能も生じてこないもの」と定義される。必然性に対する。必然的なものについては論証と理論的知識が成り立つが、偶有的なものについてはこれが成り立たない。

~~~~~

では、なぜ日本のメーカーは、iPod をつくることができなかったのか。「iPod」という概念が生み出せなかったのか。ただすぐれた部品があるだけでは、iPod をつくり出すことはできないからだ。ハードとソフトを組み合わせる技術はもちろん、**音楽業界と権利調整をして音楽配信への協力を取りつける**といった、**総合的な力が必要**だ。いくら部分最適が充実していても、それをコーディネートして全体最適にしていくトータル力がないと、これからの時代に、すごいものを生み出すのは難しいだろう。

いまの日本では、組織の壁に阻まれているのか、企業の覇気が失われているのか、現状を打破するような強い力がなかなか発揮できない。

「ハードウェアとソフトウェア」について考えるとき、忘れてはならないことがある。**二項対立的にとらえないこと**だ。

コンピュータにとっては、ソフトウェアが大事である。だが、当然のことながらソフトウェアは、コンピュータというハードがあってはじめて成立する。

それほどこの職場でも同じである。かぎられた人の智慧や活躍ばかりをあてにしている、自らやろうという意志は芽生えない。「部下は上司の言った通りにやればいい」「現場は管理部門の決定に逆らうな」などと、**上意下達で硬直したもの**になってしまう。**肝心の「智慧を出す能力」「考える人材」が育つ余地がない。**

「言わなくてもわかっていた」ことを、だれもができるように明示化していく必要がある。それによって、総合力を高めていかなければならないのだ。

気をつけなくてはならないのは、充足するあまり、自分たちの中だけで閉じてしまわないようにすることだ。自分たちの「ふつう」が、ほかの人にとってはそうではないかもしれないということを忘れてはいけない。だから、自分の「宇宙」や価値体系を、普遍的な言葉で伝えていくことも必要だ。

トヨタの工場

かつてノンフィクション作家鎌田慧氏が『自動車絶望工場』（一九七四年）で描いたような暗いイメージは、いまではかけらもない。あるのは、**楽しさと希望にわくわくする雰囲気だ。特に、組み立てラインがきれいだった。**ビジュアル的にも明るく、楽しく、心が落ち着くほどだった。そこには、脳のベストパフォーマンスをうながす緊張と喜びのバランスがとれた、快適に働ける空間が広がっていたのである。

脳は、高いプレッシャーのもとでベストパフォーマンスを行うときに、報酬系が最も活性化する。脳の神経伝達物質では、「幸福物質」であるドーパミンが大量に分泌される。だから、**強烈なプレッシャーがかかった状態でうまくやりきることができたときこそ、脳は最大の喜びを獲得できる**のである。

地道な作業を意欲的にやり続けるには、「自分の存在を認められる」「効果が目に見えて表れる」「**自分が成長する**」といったことが重要だ。

時が流れ、現代の日本は、自信を失いつつあるように思われる。「ジャパン・バッシング（日本叩き）」から、「ジャパン・パッシング（日本軽視）」、さらには「**ジャパン・ナッシング（日本無視）**」へと国際社会の潮流が変化していくと懸念される今日。私たちが元気を取り戻すには、どうすればいいのだろうか？

いっそのこと一度徹底的に負けたらどうかと私は思う。真綿で締められるように徐々に元気を失っていくよりは、直接ぶつかって、彼我の差異を徹底的に心身にしみ込ませたほうがいい。

明治以来の日本の最大の謎の一つは、これだけ科学や技術が発展し、経済的にも力を持つにいたった国から、**思想的には世界を動かすような学者、表現者が皆無**とっていいくらい出ていないことである。

...

一方、人文科学の研究者たちは、そのすべてがというわけではないが、日本語という言語空間の中でまどろんでいる。もちろん、英語で論文を書いたり、外国に留学したり、国際学会に出席するのは、人文科学の研究者にとっても当たり前のこととなっている。しかし、さらに進んで、英語圏を中心とする世界の中でインパクトのある成果を発表するという人はなかなか出ない。